



アメリカサッカー、自由なる進化 ～過去の失敗を乗り越え、新たな道を歩む大国～

“サッカー不毛の地”と言われて久しいアメリカサッカーが、知らぬ間に進歩を遂げていることをご存知だろうか？
かつての失敗はもう過去のもので、今、アメリカサッカーは自由な発想の下、強豪国の仲間入りを目指している。

文・写真◎中山 淳
Text & Photo by Atsushi Nakayama

あの暗黒時代に未来の種が蒔かれ 90年代からその種が開花し始めた

よくよく考えてみると、アメリカの広大な大地に足を踏み入れるのは、94年のワールドカップ以来のことだった。

あのとき、生まれて初めて“生ワールドカップ”を体験する幸運に恵まれ、それこそ眠れないほどの興奮を覚えて成田を飛び立ったことを今でもよく覚えている。

しかしそれ以上に、脳裏に刻まれているのは、ダラスのコットンボウル・スタジアムに向かって意気揚々と歩いている途中、それまで覚えていた興奮が、すーっと冷めていくという妙な感覚に襲われたことである。

本当にここでワールドカップが行われているのか？

確かそんな感覚だったような気がする。決戦前の殺気立った空気はもちろんのこと、

サポーターに緊張感や気合いがまったく感じられない妙な長閑さ。アメリカの広大な大地に飲み込まれてしまったのか、欧州の本場ドイツ人たちもお祭り気分、裏に和やかな空気が流れていたのである。

おそらくそのとき以来、アメリカでワールドカップの開催はあり得ない、という固定観念が染み付いてしまったのだろう。サッカー不毛の地とはよく言ったもので、アメ

リカにサッカーが根付くなどとは、そのときまったく考えもしなかった。

しかし、もうあれから12年の歳月が過ぎ、アメリカのサッカー事情も大きく変貌を遂げたようだ。前回ワールドカップの成績も、最近の代表チームのクオリティも、欧州のサッカーシーンを眺めてみても、アメリカサッカーの変化を感じ取ることはいくらも難しい作業ではない。

一体、この12年の中で、アメリカサッカー界にどんな変化が起こったのか？

頭の中に「？」マークが現れると、どうしてもそれを知りたくなる性分で、それで、成長するアメリカサッカーを“ディスカバー”してみたい、そう思ったわけである。

代表チームはすでに日本と同等、もしくはそれ以上のレベルにあるとも言われるスポーツ大国アメリカのサッカーは、このま



ま進化を遂げていくのだろうか――。

「まず、私たちの良い出発点となったのは、1988年だったと言えるでしょうね」

そう切り出したのは、イリノイ州はシカゴにあるアメリカサッカー連盟の広報責任者ジム・ムーアハウスさんだ。

「この年に94年のワールドカップをアメリカで開催することが決まったんですが、正直、当時のアメリカサッカー界は何もない状態でした。40年近くもワールドカップに出場しておらず、プロリーグもなかった。テレビでサッカーを放映する局もなければ、国民はワールドカップの存在さえ知りませんでした。しかし18年後の現在、状況は一変

しています」

そう言っ、アメリカサッカーの現状を話してくれたが、それは18年前の状況と比べて美に対照的な話だった。

5大会連続のワールドカップ出場で前回はベスト8入りしたこと、11年目を迎えるプロリーグ、MLS(メジャー・リーグ・サッカー)が順調に成長していること、テレビで世界中のサッカーが見られるようになったこと、国民のほとんどがワールドカップに関心を持つようになったこと。

「ゆっくりですが、確実に全体のレベルは上がっていると思います」

確かに、この18年間のアメリカサッカー界の変貌ぶりは、目を見張るものがある。

日本サッカーの発展ぶりとはほぼ時期を同じくして、アメリカサッカーも劇的な進歩を遂げている。また、暗黒時代を経験しているという点も、実に日本とよく似ている。そう、アメリカサッカー界の暗黒時代は、かつて一大ブームを巻き起こした北米リーグ(NASL)の失敗に端を発する。

1967年、ベレ、クライフ、ベッケンバウアー、ベストといった世界的スター選手をかき集めて北米リーグを立ち上げたアメリカサッカー界だったが、ブームが一瞬にして去ってしまった。84年には悲惨な状態での幕を閉じるという大失敗を経験しているのだ。“サッカー不毛の地”と周囲に揶揄されるようになった最大の原因は、実はこの